

天下茶屋跡



〈西成区岸里東2-10〉

天下茶屋の地名の由来となった茶屋の跡地に立つ記念碑。今より400年余り昔、太閤秀吉が住吉大社への参拝や堺へ往来する道中に立ち寄ったとされる茶屋の一角が保存されている。当時、この辺りには、茶屋が点在していたと言われるが、その起源は、かつてこの地には「天神の森」と呼ばれる鬱蒼とした森が広がっており、そこから湧き出る水の良さに着目した千利休の師「武野紹鴎」が森を切り開いて道をつけ、茶室を建てたのが始まりとされている。天正年間には、楠木正幸の十世孫であると言う初代芽木小兵衛光立が、この場所に茶屋を開き、その後、芽木家の三代目小兵衛昌立の時代になり太閤秀吉が道中で立ち寄り、千利休に点てさせた茶の味の良さに感激し、この地の泉に「恵の水」の銘を授けると共に芽木家には、玄米年三十俵の朱印を与えたとされる。その事から関白殿下の「殿下茶屋」、天下人の「天下茶屋」と呼ばれるようになった。

天下茶屋公園



〈西成区岸里東1-15-18〉

住吉街道(紀州街道)に面する見通しの良い大きな公園で、大阪市の資料には、広さ約8,052㎡(約2,435坪)と記されている。西成区内にある19の都市公園の中では最も歴史が古く、昭和26年4月開園となっている。園内には、多数の桜の木が植えられており、毎年4月頃になると見事な花を咲かせ、多くの見物人の心を和ませる。石碑や古木が立ち並ぶ古代森を思わせる厳かな雰囲気を持つ一方で、近代的に整備された床やベンチ、遊具類なども配置されており、老若男女を問わず憩いの場として親しまれている。また、明治天皇が住吉大社への参拝途中で、この地にあった茶屋で休息を得られた事を示す「休息石碑 明治天皇駐蹕遺址碑」(ちゅうしついしひ)「明治天皇聖蹟碑」(せいちよくひ)等が今も保存されている。また、かつてこの地に存在した漢方薬(和散)を扱う薬店「是齋屋」(これさいや)の跡地、四天王寺の末寺であった阿倍寺から移転された「礎石」など、多数の貴重な史跡も保存されている。

安養寺



〈西成区岸里東1-7-15〉

浄土宗 知恩院派一心寺に属する寺院で、山号は昌芳山、本尊には阿弥陀如来をお祀りする古の尼僧寺である。その歴史は古く、元禄二年(1689年)「貞誉清薫尼」によって創建され、その後1887年の失火と1945年の大阪大空襲で焼失し、現在の堂宇は、1959年に再建されたものである。境内には、近松門左衛門の浄瑠璃「心中天網島」(しんじゅうてんのあみじま=大阪天満の紙業 紙屋治兵衛と曾根崎新地 紀の国屋の芸妓 小春との情死を題材とした演目)の主人公、紙屋治兵衛の妻「おさん」の墓石、「鯛屋貞柳柳」の流れを汲む狂歌師、「佐藤魚丸」、大阪相撲の名力士と謡われる「猪名川弥右衛門」などの墓石が安置されている。春先になると境内の桜が見事な花を咲かせ、和やかで気品溢れる佇まいに心が落ち着く思いがする。また、西側正門脇の外堀には、本質的で心に響く言葉の数々が、さり気なく掲げられている。

正圓寺〈聖天さん〉



〈阿倍野区松虫通3-2-32〉

弘法大師を宗祖とする教王護国寺派の真言宗の寺院であり、所在地は阿倍野区となるが、通称「天下茶屋の聖天さん」として地元で親しまれている。その歴史は極めて古く、天慶二年(939年)光道和尚により開基され、当時は現在地より東に500mほど離れた場所に存在した般若山阿倍寺の一坊であったが、それから750年の時を経て義道見明和尚が寺を移転し、海照山正圓寺と改めた。本尊に祀る木彫の「大聖歡喜双信天王」は、日本最大であると言う。この歡喜天は、仏教の守護神として天部に属す仏として知られ、人気小説でTVドラマにもなった「夢をかなえるゾウ」に登場する象頭人身の古代インド神ガネーシャとしばしば同一視される。また、「聖天山」としては、大阪五低山の一つに数えられ、他には天保山、御勝山、茶臼山、手塚山などが知られている。寺院と同じ敷地内に隣接する聖天山公園は、地域の子供たちの良き遊び場となっている。



天神ノ森 天満宮



〈西成区岸里東2-3-19〉

住吉街道(紀州街道)に面した表参道に大きな石造りの鳥居が見える。中に進むと広々とした空間が広がり、拝殿を取り囲むように妙齡の古木や御神木が姿を見せる。ここ天神ノ森天満宮は、応永年間(1400年代)に創建され、京都市の北野天満宮より分霊を奉斎したのが始まりとされている。現在の本殿は1937年頃に再建されたものである。主祭神には、「菅原道真公」、境内の末社(小さな神社)には、「天照大神」「猿田彦命」「稻倉魂大神」「白雪龍神」「白髭竜王」「白竜大明神」をお祀りしている。また、境内の一角に安置されている(子安石)は、かつて豊臣秀吉も住吉大社への道中で立ち寄り、参詣したとされている。また、千利休の師である茶人の「武野紹鷗」が晩年、この地に茶室を建て隠棲していた事に因んで「紹鷗森天満宮」、長い年月をかけて父兄の仇をこの地で討ち取った「天下茶屋仇討ち事件」に因んだ「天下茶屋天満宮」など多数の呼び名でも親しまれている。

天神ノ森天満宮〈社内〉



天神ノ森天満宮の史跡

天神ノ森天満宮の境内には、多くの史跡が保存されている。

〈天下茶屋の仇討ち供養塔〉

その昔、直系の尊属(親など)を殺害した者に対して被害者遺族が私刑を下す「仇討ち制度」が公的に許されていた。慶長5年(1600年)備前国(現岡山県辺り)の大家の家臣が政治的な策謀による闇討ちに会い、その仇討ちを誓って旅に出た息子兄弟は、苦勞を重ねながら諸国を訪ね回り、9年の歳月を経た慶長14年(1609年)、ついにこの天神ノ森天満宮の南50mほどの所で犯人を追い詰め、晴れて仇討ちを果たしたと伝えられる。当時、その場所には供養塔が建立されていたが、昭和33年頃に行われた道路整備の際に天神ノ森天満宮の社内に移転され、現在も保存されている。

〈子安石〉

太閤秀吉が、淀殿懐妊の際の安産祈願のため参詣したと伝えられる。今でも、安産を祈願する多くの人々が参詣に訪れると言う。

上の天神 生根神社



〈西成区玉出西2-1-10〉

国道26号線沿い玉出商店街入り口の向かいの道を少し入ったところに大きな鳥居が建っている。ここ生根神社の創立年代は不詳とされているが、もともとこの一帯は、住吉大社の神領であったことから、住吉大社の摂社としての生根神社であったと考えられており、その後、住吉大社から独立する際に主祭神の分霊を玉出(勝間)の産土神として奉斎したのが始まりとされている。社内は、比較的樹木が少なく、風通しの良いスッキリとした空間が広がり、中央には立派な拝殿、その周囲には、複数の摂社(神社内の小さな神社)が配置されている。また、屋台が多数出店する盛大な夏祭りは有名で、メインイベントの「だいがく祭」は、もともとは干害の折に鈴などを付けた櫓(やぐら)を担ぎ、雨乞いを行ったのが始まりとされていて、その習いが現代に受け継がれたものとされる。多数の提灯を吊り下げた巨大な櫓を音頭にあわせて勢い良く練り回す光景は、近隣の夏の風物詩となっている。また、毎年冬至日には、この地の名産品であったカボチャ(勝間南瓜)を食して無病息災を願う、こつま南瓜祭りも開催されている。

西宝寺〈波切不動尊〉



〈西成区聖天下1-6-22〉

静かな住宅街を少し進んだあたりに真宗興正派の寺院「西宝寺」が見えてくる。本尊に阿弥陀如来をお祀りする他に有名なのが「波切不動尊」である。この波切不動尊の謂れは、弘法大師(当時の空海)に端を発する。遡ること今より1200年ほど昔、私費を使い遣唐使らと共に留学していた空海は、唐(中国)から帰国する時に乗っていた船が未曾有の大嵐に巻き込まれ、今にも沈没せんという苦境に立たされた。その時、空海は留学先で師事していた唐の伝法阿闍梨(高僧)惠果和尚より授かった霊木に不動明王を彫り刻んで船首に掲げたところ、仏像から炎が噴き上がり、その手に持つ三鈷剣が荒れ狂う波を切り裂いて道をつけ、船は無事に帰途に就く事が出来たと言う。この時に空海が自ら彫りしたためた不動明王像は、高野山別格本山南院に今も保存されている。そして、ここ西成区の西宝寺にも同じく「波切」の二文字が付いた不動明王尊がある。この仏像は、昭和14年頃に茶白山の西南約200mの所から出土し、この地を戦火から守るなど幾多のご利益を授けたことで人々から感謝を込めて親しまれ続けている。今も、遠方からも多くの人々が参拝に訪れると言う。